

月
刊

いっしょのとも

第十四卷
八月号

無くそう障害者差別

障害児

もつ親たちの

社会から

受けるストレス

いつまで続く

身近で

起こる差別を

聞くに忍びず

しつけ無用論の悪影響

悪い子を

ほめ甘やかす

幼稚園

小学校では

問題児

学級崩壊

起こす子となり

人生を考え直して

みたい人は(一一五)

―空海『即身成仏義』概説(一八)―

(六) 三密加持すれば速疾に顕わる

〔(六)―1 三密加持〕

「三密加持すれば速疾に顕わる」とは、謂く、三密とは、一には身密、二には語密、三には心密なり。法仏の三密は、甚深微細にして等覺(とうがく)・十地(じゅうじ)も見聞すること能(あた)わず。故に密と号(い)う。一の尊、等しく刹塵の三密を具して互相(たがい)に加入し、彼此(ひし)撰持(しょうじ)せり。衆生の三密もまた是(か)くの如し。故に三密加持と名づく。

もし真言行人有って、この義を観察して、手に印契(いんげい)を作(な)し、口に真言を誦し、心、三摩地(さんまじ)に住すれば、三密相応して加持するが故に、早く大悉地(だいしつじ)を得。

今月号の現代語訳は、頼富本宏著『日本の仏典2 空

海』(筑摩書房刊)から、引用させて頂きます。

* * *

「ほとけとわれわれとの三種の行為形態が、不思議なはたらきによって応じあうとき、すみやかにさとりの世界が現れる」という第三句を解釈しよう。

三種の行為形態「三密」とは、第一には身体、第二には言葉、第三には心の、それぞれ深遠なはたらきである。

真理の当体としての仏の身体・言葉・心の三種の活動は、きわめて奥深く、またこまやかであって、さとりの内容が仏と等しい菩薩や、それ以下の十段階の位で修行する菩薩も、見聞し、覚知することができない。それゆえ 深遠なはたらき「密」というのである。

(マンドラに登場している)一つ一つの尊格は、いずれも均等に無数の三種の行為形態をそなえており、お互いに力を加えあい、かれとこれが相支えあう関係にある。われわれ(凡人)の身体・言葉・心の行為形態もまさに同様である。その結果、「ほとけとわれわれとの三種の行為形態が、不思議なはたらきによって応じあう」「三密加持」と名づけるのである。

もし、真言密教の修行者の一人が、この意味を正しく観察して、手に印契を結び、口に真言を唱え、心を瞑想

の境地に集中するならば、ほとけとわれわれのそれぞれの三種の行為形態が、あい応じあい、力を加えあうから、すみやかに偉大なさとの完成の境地を得るのである。

* * * *

ここに書かれていますのは、とても深遠なことです。解説的現代語訳を読まれるかぎり、文字面では、それほど難解な言葉はないと思いますが、内容はとても心の底から理解できることではないと思います。理解し、納得するには、体験がいると思います。

さて、原文の出だしにあります「三密加持」ですが、これにつきましては、既に、昨年（第十三巻）の四月号で詳しく述べました。ご参照いただければ幸いです。

復習と補足ないし発展的な説明を兼ねて、少し述べてみたいと思います。

三密を言うときは、大抵、「身・口・意の三密」という風に身・口・意を付けて言われます。

それらは、私の「人間精神の心理学モデル」で言いますと、「身」は感覚―運動（からだ）の働き、「口」は認知―言語（あたま）の働き、「意」は情動―感情（こころ）の働きに当たります。

この三つの二項対の後者、つまり、（手での）運動、（口での）言語、（こころでの）感情の、自分における

働きが仏さまのそれと一体になるとき、それを三密加持と呼ぶのだと思うのです。

真言密教の修法（お祈りの修行）では、仏さまの印を手結び、仏さまの真言を口に唱え、仏さまの願い（働き「慈悲」）をこころに観想するのですが、それは、仏さまの他己の働きと自分の他己の働きとが一体になると、つまり、自分の手でする印が仏さまの印であり、自分の口で唱える真言が仏さまの真言であり、自分が仏さまを思う心が仏さまの心である、ということなのです。

それが、実は、無意識の領域で自分の自己と他己とが統合がとれて一体になるということです。心理学的には、それが、「入我我入」のメカニズムなのです。

その時、自分の中の自己と他己の各水準の精神機能も統合が取れるのです。具体的には、自我と人格、認知と言語、感覚と運動、情動と感情、煩惱蔵識と如来蔵識が全て統合が取れるということです。そして、これらのすべての要素が、渾然一体として統合が取れるのです。

しかし、こうした仏さまの身・口・意の三密は、自分の、いま述べましたような体験を通じて覚知できるだけです。それを「密（＝奥深くて知りがたい）」と呼んでいるわけです。人間は誰でもが、解脱の可能性を秘めています。でも、仏さまの三密を真に理解できるの

は、仏の境地に至った人だけなのです。

「法仏の三密は、甚深微細にして等覚（とうがく）・十地（じゅうじ）も見聞すること能（あた）わず。」とある通りなのです。

実は、この言葉は、既に、昨年（第十三巻）四月号に出てきました。そこでは、次のように述べられています。「法仏の三密は等覚も見難く、十地も何ぞ窺わん。故に身秘密と名づく。」と。

これらに出てきました等覚は、現代語訳にありますように「さとりの内容が仏と等しい菩薩」なのですが、そうした菩薩にすら見聞することができない、と述べています。さとりの内容が仏と等しいのなら理解できそうですが、実は、この等覚という位は、菩薩修行の仏に至る一歩手前の位なのです。

私は、よく学生にも言うのですが、解脱に達した仏の境地は、数学で言えば1なのですが、達しなければ0なのです。そこには、超えがたい断絶があるのです。数学的には0をいくら足しても0なのです。決して1にはならないのです。

参考までに、菩薩修行の階位には次の五十二位があります。十信、十住、十行、十回向、十地、等覚、妙覚〃仏です。

自作詩短歌等選

日本人の信頼の喪失

作家の宮本輝氏は次のように言う

今の世の中

約束があまりにもないがしろにされている

また

約束が

軽んじられるのは

日本人が

大人になれないで

幼稚化している

からではないか

と

でもなぜ

そうなっていくのか

残念ながら

いつものように

その理由・原因についての指摘がない

それは

他己の喪失ということなのだが

過労死・自殺

労働者の

過労死・自殺は

世界に類を見ない

日本病だという

厚労省が

過労度を自己診断できる

チェックリストを

ホームページで公表した

ら

アクセスが殺到し

コンピューターが

ダウンしたという

リストラ断行で

働くことを強制される

哀れな働きバチたち

他方には

労働意欲のなくなった

若者たちがいる

時代に合った総理

小泉総理を評して

「情」のない男と

ドライな世間に

ドライな政治家

ということなの

レイプも正常

ご時世か

国会議員が

レイプこそ

元気があつて

正常と言い

唯我独存の親子

民主主義

言わずもがなの

個人主義

親も子もなし

唯我独存

ロシアのアイドル

ロシアから

来たアイドルの

行動は

ロシアの人の

規範喪失

示すもの

危機に備えた食料確保

岐阜県が

食料危機を

予測して

アルゼンチンで

農業をする

万引きの蔓延

子どもたちに

万引きが蔓延している

これも

大人の規範意識喪失の

一つのあらわれ

だって

子どもは

親の鏡なのだから

破戒の自由

長崎幼児殺人事件の

十二歳の犯人は

黒ではなくて

心に白い闇を

もっているという

黒い闇には

あかりが灯せる

でも

白い闇には

何を灯せばいいのか

それが

分からないという

自作随筆選

自分以外はバカ

七月十日付けの朝日新聞「文化」欄に、作家の吉岡忍氏が、「『自分以外はバカ』の時代 ばらばらな個人、暗鬱な予感」と題して、意見を寄せておられました。

読んで、なるほどその通りだと共感したのですが、残念なことに、なぜそうなっているのか、どうしたらそこから抜けることができるのか、がまったく書かれていませんでした。そのことを、この方の記事に即して述べてみたいと思います。

この方は、ここ数カ月、毎週のように、取材や講演のため、各地を旅行されているとのことです。そして、行く先々に沈んだ光景が広がっている、と感じておられるようです。

この記事では、そうした光景の数々やその原因などが指摘されたのち、次のように述べられています。

「・・・いまこの国は『自分以外はみんなバカ』と思っている大衆によって構成されているのではないか、というのが方々歩いてきた私の観察である。これは『大衆

文化』を前向きにとらえた敗戦直後とも、『赤信号みんなで渡れば怖くない』とばかりに大衆を勢いづかせた高度成長期からバブルにかけての時期ともちがう、新しい現実である。」と。

さらに続けて次のように述べておられます。

「この現実はやっかいだ。自分以外はみんなバカなのだから、私たちはだれかに同情したり共感することもなく、まして褒めることもしない。こちらをバカだと思っている他人は他人で、私のことを心配したり、励ましてくれることもない。つまり私たちは、横にいる他者を内面から理解したり、つながっていく契機を持たないまま日々を送りはじめた——それがこの十余年間に起きた、もっとも重苦しい事態ではないだろうか。」と。

ここに引用させて頂きました文章は、日本が陥っている現実の、なかなか的確な指摘だと思います。でも、この方は、この十余年の現実が、敗戦直後のそれとも、あるいは「赤信号みんなで渡れば怖くない」と大衆を勢いづかせた高度成長期のそれとも違うものだ、とおっしゃっています。私から見ると、今日の事態は、敗戦後から今日まで、日本が一貫してたどらなければならなかった、必然の帰結のように思うのです。

確かに、見かけは違うように見えますが、日本が陥っ

ている今日の事態は、結論的に言いますと、敗戦後、日本があらゆる信仰や宗教を公教育から排除させられ、民主主義（自由主義・資本主義）を唯一の思想（生き方）として生きてきた、その結末なのです。

はじめてこの随筆を読まれる方には、すぐにはご理解いただけないかも知れませんが、日本は、信仰や宗教を無視して、能率よく経済一辺倒にやってきた、世界におけるお手本なのです。

しかし、その付けが、いま回されてきているのです。世界的に、人々の「自己中心化」が進んでいます。日本はその最先端モデルを世界に先駆けて提示しているのです。

大多数の日本人は、日本はアメリカをお手本にしてやって来たし、今後もそうすべきだと思っていますが、日本とアメリカには、根本的に異なっている点があることに気づいていません。それは、日本が宗教や信仰を失っているのに対して、アメリカは、先進国では世界に類を見ないほど信仰を保って来ている、という点です。

実は、そのアメリカも、民主主義・資本主義の進展につれて、徐々に、信仰が失われてきています。特に、インテリや指導者（リーダー）層がそうなっているのです。

とはいっても、これまでは、人種の坩堝（るつぼ）と

言われながら、よく一つの国としてまとまって経済的にも発展して来れたのは、キリスト教のお陰だったのです。しかし、そのアメリカからも、そのキリスト教が徐々に失われてきているのです。

日本は、その意味で、アメリカのお手本になっていると言えるのです。

日本は、敗戦後、経済的な復興・発展のみを願って、がむしゃらに突進してきて、なんとか「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と言われる程に経済的に豊かになって来ました。しかし、その豊かさも、バブルの崩壊を契機に、空しさが先立ち、さて、次に何をなすべきなのが、まったく分からなくなってしまうのです。私の理論で言いますと、民主主義・資本主義のもとで「自己」のみを追求して来て、「他己」が弱体化し、結果として、日本全体がお先真つ暗という、「暗鬱」な状態に陥っているのです。この方が、引用文で述べておられます「他者を内面から理解したり、つながっていく契機を持たない」と言われますのは、まさに、私の言う「他己」の喪失を表すものなのです。

現在、日本の学校は、殆ど崩壊したと言えるほど、荒れてしまっています。でも、文部科学省の政策をみますと、真の原因に気づいていませんし、的確な危機感を欠

いています。ですから、文部科学省が解決策だと思う政策が、かえって、教育現場の混乱を助長しているのです。

民主主義教育では、一人ひとりが自分の意見を持つことが、大切とされます。そして、その意見をどこまでも主張することが奨励されています。実は、民主主義では偉人はいらぬのです。そこでは、一人ひとりが偉人にならなければならないのです。

実際に、学校では、自分の意見を積極的に言う児童・生徒が尊重され、高い評価を与えられています。他者のこころを尊重して、あるいは、先生の権威に従って、意見の表明を控える子どもは、たとえ学力があっても、低い評価しか与えられていません。最近実施されだしました「絶対」評価の制度によつてこの傾向は、一層助長されています。こうした制度も、学力低下の一つの原因をなしていると思えます。一方では、競争（自由競争）を助長しているのに、他方では、それをゴマかすこと（絶対評価）をしているのですから。

民主主義教育では、ですから、自分が賢いと思うように一人ひとりを教育しているわけです。ということは、逆から言いますと、「自分以外はバカ」だと思つように教育している、と言えるわけです。基本的に、他者への配慮をするようには、教育していません。中心はど

こまでも、自分の「絶対化」なのです。

私たち人間だけではなく、この世に存在するものは、すべて相対的です。お互いが「相（あい）対して」存在しているのです。人間だけがこのことを自覚することができます。ということは、人間だけが、他者のことを配慮して行動することができるということなのです。

それが、私の言います「他己」をなすものなのです。ご理解いただけないかも知れませんが、それが、根本的には信仰なのです。

相対な私たちに「存在」を贈ってください。絶対なるもの（宇宙根源の原理）をひたすら求めて、そのものと一体なる体験、つまり、私たち相対な存在を超えて「絶対」な境地に至った人たち（聖者）の教えを信じ仰ぐこと、それが信仰なのです。そして、私たちも、一人ひとりがその教えに則って、自分への執着を超えて、他者の為に生きて行かなければ、人々に真の幸せは来ませんし、世界に平和も訪れないのです。

この方の言われる通り、世界中が、「個々ばらばら」に、自分への執着を強め、互いに争い合っています。日本はその最先端にいます。そこから、抜ける道は、世界中の人が、真の信仰を取り戻すことなのです。それ以外に、他者を真に尊重する文化は生まれようがないのです。

釈尊のことば（一一四）

— 法句經解説 —

（三七七）修行僧らよ。ジャスミンの花が萎（し）おれた花びらを捨て落とすように、貪りと怒りとを捨て去れよ。

ここで言います「貪り」と「怒り」は、十善戒（不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不綺語、不惡口、不兩舌、不慳貪、不瞋恚、不邪見）でいいますと、不慳貪（ふけんどん）戒と不瞋恚（ふしんに）戒に当たっています。

仏教では、この二つに、不邪見を加えて、三毒と呼び、他のからの七つの悪を為さしめる原因をなすものと考えられています。それだけ重要視されているわけです。

以前にも何度も書いたことありますが、前掲しました十善戒の「が」からだ（身）で犯す悪、が「あたま（口）」で犯す悪、前述の「が」が「こころ（意）」で犯す悪を、それぞれ戒めるものになっているのです。

私の「人間精神の心理学モデル」でも、意識領域の最

下層をなす「こころ（情動・感情）」が人間として最も大切な精神機能だと考えています。

人間が動物と違って人間なのは、「他己」が「自己」から分化したからなのですが、その他己の意識領域での働きを心理学用語で「感情」と呼んでいます。一般的な言葉でいいますと、「人の心を感じるこころ」と言えるものです。最近、とみになくなっています「優しさ」や「思いやり」などもここに入ります。もっと言いますと、他者の悲しみを我が悲しみとし、他者の喜びを我が喜びと感ずるところです。

中国の伝統的思想である儒教では、「仁」がとても重視視されていますが、この仁は、自己の情動を抑えて、つまりコントロールして、他者を尊重あるいは愛することなのです。

これは、まさに、人間として「こころ」の大切さを主張します私の理論と符合するものです。実は、逆に言いますと、人間として大切なだけに、それだけ難しいことでもある、ということなのです。

でも、現代の日本人は、それが人間として実行が困難な課題だといった意識すら喪失してしまっています。実は、それを再生産していますのが、残念ながら、学校教育なのです。

いま学校では、特に小学校では、この「こころ」は全く評価されていません。善い人間とは、このこころを持っている人間なのですが、人格完成をめざす学校教育ですら、人間として最も大切な面が完全にながしにされているのです。

それに代わって、政治家や財界人や高級官吏のように嘘を含めて自己主張が堂々とできる子が、全ての面で評価されています。たとえば、教師の質問に、よく正解が判らなくても、「はい、はい」と積極的に手を挙げる子が評価されるのです。たとえ当てられて、答えられなくても、「判っていたのですが、すっかり忘れてしまいました」と言うような場合でも、教師は殆どがめまません。「はい、よろしい。思い出したらまた言って下さい」といった具合に、その積極性を逆に評価するのです。

このまま行きますと、日本の社会秩序は、ますます崩壊していくことでしょう。たとえ、日本人、直接的には文部科学省が、このことに気づいて、教育を改めても、その効果が社会に現れてくるのは、五十年ぐらいはかかるのではないのでしょうか。

話が、少し横道にそれたかも知れませんが、人間として最も大切な点を説く、この偈も現代人には、まったくの死語になっているのではないのでしょうか。

（三七八）修行僧は、身も静か、語（ことば）も静か、心も静かで、よく精神統一をなし、世俗の享樂物を吐きすてたならば、（やすらぎに帰した人）と呼ばれる。

この偈の最後の「やすらぎに帰した人と呼ばれる」とが、果して、現代の日本で求められているのかどうか、きわめて疑問のように思えます。もし求められているとすれば、金と名誉を得れば、安らぎも得られると考えての事ではないでしょうか。まったくの間違いです。

金も名誉も、あるいは権力も、食べるものさえなくても、安らぎの境地（ニルヴァーナ・解脱）はあり得るのです。それこそが、絶対的な安静なのです。大樂なのです。

そのためには、例えば、『即身成仏義』でも書かれていますような、「身口意三密加持」の修行がいるのです。もっと一般的には、前の（三七七）の偈にありましたように、

。「身を静かにすること」である、 不殺生、 不偷盜、
不邪淫の戒律を守り、
。「語（ことば）を静かにすること」である、 不妄語、

不綺語、 不惡口、 不兩舌の戒律を守り、

。「心を静かにすること」である、 不慳貪、 不瞋恚、
不邪見の戒律を守りながら、

。「精神統一」の修行に励まなければならないのです。
精神統一の修行とは、具体的には、真言密教の修法、
ヨーガ、坐禅、読経、等々です。それらのどれかを、毎日、ひたすら行う必要があるのです。

そうすることが、以前も述べたことがあると思います、
「戒・定・慧・解脱・解脱知見」の前の二つの「戒」と「定」に当たっているのです。

そして、そうするためには、「世俗の享樂物を吐きすて」なければならないのです。「吐きすて」とは変わった言い方ですが、テキストにしています本の訳者である中村元訳注によりますと、これは当時のジャイナ教の言い方をまねたものだそうです。

さて、世俗の享樂物ですが、現代では無数にあると思います。たとえば、スポーツ観戦、競輪・競馬・競艇、映画鑑賞、飲み屋通い、カラオケなどなどです。

道元禅師も、僧侶たるものは趣味に興じてはならないと述べておられますが、この偈に通じるものです。

現代の日本では、僧侶も高級外車に乗り、夜な夜な銀座の高級バーに飲みに行く時代です。悲しいかなです。

後記

一、今年は、スカッとした夏空が、なかなか訪れないようです。なんだか異常気象のように思えます。

二、「持続可能な開発」などと言っているようでは、自然破壊は免れないように思います。悲しいことですが、このままでは、世界規模で自然は汚染され、秩序が破壊されて行くことは必定です。今は世界的なエゴ追求の結果、物の尊厳が蹂躪され、生命の尊厳が蹂躪され、精神（人間）の尊厳が蹂躪される時代になっているのです。

三、最近、NHK第一放送ラジオ深夜便の「こころの時代」という番組で聞いたことがあった安保徹という方の「自律神経免疫療法」という話に引きつけられて、この方の本を読んでいます。引きつけられましたのは、「ガンは自律神経の交感神経と副交感神経のバランスを保つことで、治る」という点です。ガンの他にも、いろいろな病気も挙げられています。例えば、痔疾、胃炎、胃潰瘍、腸炎、盲腸炎、潰瘍性大腸炎、歯槽膿漏などです。

四、私は、大学を退職後は、「ひびきのさと人間精神学研究所」や「こころの健康心理クリニック」などを開設したいと思っています。

五、かつて「足裏診断」であれだけお金を集め得たことをみても分かりますが、多くの方がガンなどの不治の病

で悩まれ、わらをも掴むように気持ちで、何かに救いを求めておられることを知りました。そういう方のお役に立てることはないかと考えていたこともあり、関心をもったというわけです。

六、この方の本を読んでみたいという方がありではと思いますので、読みやすいものを一冊だけ紹介しておきます。安保徹著『ガンは自分で治せる』（マキノ出版）です。値段は、一三〇〇円です。

七、京セラの名誉会長・稲盛和夫氏の本を読み、私の理論が分かって頂けるのだと思います、論文とお手紙を差し上げました。受け取ったというお返事を頂きました。

月刊 こころのとも 第十四巻 八月号 (通巻 一六四号)	平成十五年八月八日 〒772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 ^{せいの}
---	---

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610-8-38660

